

篠本二郎

五高時代の夏目君

五高時代の夏目君

一

夏目君と別後二十余年を経て余が五高に教鞭を執りつつありし或日、夏目君が突然訪ねて来て余を驚かした。一見幼時の面差の変らざるを見て、実に嬉しく感じた。何の為に君は此所に来たかとまず尋ねた。夏目君は君の学校に転任したからこれから宜しく頼むと挨拶された。余は猶更驚き且喜びて、頼むも頼まるるもあつたものでない、こんな喜ばしきことは亦とあるまいと答えた。余は久しく君の名も忘れて居たが、近年松山の中学に就

職されて令聞あることを伝え聞いて、私ひそかに喜んで居たのである。時に松山の学生の風は如何な塩梅かと尋ねた。君は曰く、てんで話にならない。教師が生徒に対して其の罪を糺し、或は諭す場合にも、生徒は何時も私の損であるから犯しました、若くは私の徳であるから致しましたと答うるを通例とし、毫も事理を弁じないから、殆ど諭戒の甲斐がない。全然利己の外に一片の節操だも抱かざる有様であつた。僅かの間就職して居たが、生来こんな不快なる間に衣食したことがないと、長大息された。彼の『坊ちやん』の小説も、斯く不平の間に胚胎したも

のと思わるる。

或日夏目君と昔話中に、余より彼の^か鈴木のお松さんのことを話し出して、君は覚えて居るかと問うた。夏目君は忘れる所ではない、君も僕も彼女を苛めて辛い目に逢うたから、あの時の事は終生忘れまいと言った。又お松さんは実に可愛らしき女児であつたが、行末は如何なつたか、君は知らないかと言われた。余は君も亦当時可愛らしいと思つたか、僕も当時其通りであつた、男女七歳にして席を同うせずと云うのはこんな場合から発明したのだらうと、互に大笑した。お松さんは依然加賀町に住

居して、小樽某と云う人を聳養子としたが、不幸破縁となり、今は貧困に世を送って居ると云うこと丈けを、曾て伝聞して居ると語った。然るに同君は俄に真面目になり、それは実に気の毒だ、君と僕と協力して、出末得る限り不幸の旧友を救おうではないか、僕も亦上京の時は、必ず彼女を訪ねて不幸を慰めてやろうと、余に語った。余も夏目君の昔日の如く、友情に篤きと侠氣の旺盛なるに感じて、共に此事を実行しようと思つた。其後余上京してお松さんの消息を探りしが、最近病死されたと聞き、夏目君と共に力を落した。

五高に在職時代、夏日君は屢々友人の会合する場合に、余を招いて呉れたが、余は概ね断りて行かなかつた。別に同君を嫌つたと云う訳ではない。同君と余と専門が全く異なるのと、嗜好が全然相反して居つたからである。同君の好める俳句・歌留多などは、余は全く趣味を持たない。又文学上の話も余り聞きたくない。之等の為に殆ど往来はしなかつたが、相逢う時は互に隔意なく物語つた。又同君の人格に於ては幼児の頃より崇敬して居つた。唯幼児の時と異なり、沈鬱に傾き、快活の性を一変せしは、奇態に思つて居た。

或時余は君に、君も長い間英文学に目を曝して居たろうから、大抵の英文学書類は苦もなく解釈し得らるるだろう言った。然るに君は、否々読めば読む程分らなくなつて仕舞つて仕様がな、同文学程六ヶ敷いものはないと歎息して居ると言われた。余は当時こいつなかなか読んで居るなと感心した。生なか読んだものなら、多くはえらがるものであるに、此答の塩梅では、常人は及ぶまいと思つた。

同君の留学後、余は茶話の序にこんなことを同君にたずねた。君は留学中文学上に何物か獲る所があつたかと。

君は曰く、何物もない、唯英国へ小便をしに行つた様なものであつた。故に一日も早く帰り度思つたが、漫りに帰朝することもならず、実につまらぬ目に逢つて帰朝した。其結果は留学費の不足であつて、大学の講義などはつまらぬもので、別に教師或は名家に就て問わんとすれば、金が入る。書籍を購わんとするも亦然りだ。故に三年の留学費を一度に貰い、一年も留学して居つた方が、遙に利益があつたろうと思つて居たと。留学生などが帰朝すれば、先ず目立ちて覚えらるるは、形容の所謂ハイカラに變ずると、口吻のあちらではあちらではが續発し

て、人に嘔吐を催おさしむるのであるが、同君に限り帰朝後曾て此痕跡だも認むることが出来なかつた。

二

熊本で同君と余とは一時同じ北千反畑町に住みて、僅か二三軒を隔てて居たから、時折り同君も訪ね来て互に昔話などして笑ったことがある。或日の夕君が来たから麦酒など出してもてなし、話は当時あちこちの中学に起りし生徒の同盟休校のことに及んだ。余はビールの酔いに乗じて、先ずこんな気焰を君に吐き掛けた。凡そ中学

や高等学校のストライキは、校長や教師の人格に因るものもあるうけれど、多くは教師の学識が浅薄たる為に生徒より軽んぜらるることが、主たる原因となるのだ。中学の教師にしても、五年級の生徒と師範など近く卒業したる先生とは、修業年限について三年位しか差がない。高等学校の三年と同じ大学出身の先生と、亦三年位の差だ。こんな僅かな学識の差では到底先生が椅子の威厳を保つことは六ヶ敷い。又近来諸先生が申合せた様に就任式の席上で、生徒に挨拶する時に、先生の口から諸君と共に研究したいから何分宜しく頼むなどと言わるる

が、謙遜の語としても余り意気地がない。自から師となるの自信がなければ、職に就かないがいい。こんな塩梅であるから、終に生徒に馬鹿にせらるるのである。生徒と教師とは同じ頭脳同じ研究の態度に在りても、其差がせめて十年もなければ、満足とは言われぬ、などと威張って見た。所が夏目君はほんとにそうだ、学識が深遠なれば、今日の制度に於て、多少人格に欠くる所があつても、生徒は我慢が出来様けれど、学識も人格も如何いかわしきものがあるから、ストライキも起るのである。学術の差ではないが、技術の大なる差で、最近実おかしに可笑い

ことがあった。東京に居る僕の妻の父より先日熊本へ来るについて、五六日僕の寓所に宿泊するが、生来囲碁が好きだから相手を探して置いて呉れと申越した。然しどの位の力か分らぬから、更に問合せたら、交友中大抵の素人には負けたことがないとの返事が来た。そこで僕は初段か初段に近いものと考えて、五高の仙川公篤さんが碁に強いと云うことを聞いて居たから、仙川さんに相手を探して貰うことにした。仙川さんも初段に二三目と云う強者であるそうだが、僕が妻の父のことを、同人の返事の儘に話したものだから、余程強いものと察したと見

えて、父の着後、退職陸軍軍医某を誘いて来た。僕は囲碁に趣味は持たないけれど、面白い立合と考えて、初より固唾を飲んで仙川さんと共に見物した。互先で父が白を握りて始めたが、まんまと一二目負けた。其後も夥多たび打ったが、何時も一二目負けて、終に其日は勝つことができなかった。僕も父が遙々来たことであるから、せめて一番位勝たせたいと気を揉んでも見たが、焦心するだけで効がなかった。父も合碁と見て一生懸命になつてた様であつた。其後仙川さんに逢うて、あの人は一休何の位の力の人かと質ねたら、方円社の四段だと聞いて

驚いた。何うしてそんなに強い人を誘いて来たかと聞いたら、僕の話が強そうであつたから、自分など相手になるまいと思つて、熊本中で一番強い人を頼んだと笑つた。之を聞いて驚いて父に話したら、父も大に愧じて居た。

僕は父が一体何の位打つかと聞いたら、初段には五六目だと言うから、今更当時の立合を思起して抱腹に堪えない。相手が頭抜けて強いもんだから、父が勝手に翻弄せられて、いくら燥りても勝てない計りでなく、負け方もわざと一、二石に止めたのである。それを覚らずに真赤になりて勝負を争いしことは、相手からは嘸可笑しいこ

とであつたらう。教師と生徒との学識の差がこれ位違えば、大抵なことでは紛擾は起るまいと、互に大笑したことがある。

三

夏目君が自己の責任を重んずることは終始一貫して、屡々感心したことがある。君が五高に赴任早々龍南会の短艇部長に選ばれて、其部長となつた。其部下には今法学士で、郷里の佐賀県で銀行か会社かの重役をして居る、吉田久太郎と云う名物男が短艇部の牛耳を執つて居た。

此男力飽迄強く、大抵の宮角力など之に勝つものはなかつた。加うるに義氣に富み、強きを挫き弱きを扶ける底の美性を備えて居たから、多くの生徒から愛されて居た。之と同時に又自己の忌み嫌うものを、力に任せて苛責したものだから、一部の同窓生からは蛇蝎の如く嫌われ、又職員からは之が為に度々煩を掛けらるるので、乱暴者として厭われて居た。是より先、日露戦役の志士たりし沖禎介が在学して居た時、沖も亦力強く、柔道も達者で、生徒中所謂幅をきかして居たものだが、久太郎は自己の腕力が彼よりも優れるものと信じ、且つ沖の鼻を挫かん

とした為でもあろう、或日校庭で沖に喧嘩を仕掛けて取組合を始めたが、久太郎は当時柔道を知らざりし為、忽ち投げ倒され、其上沖より下駄で頭顔の差別なく撃たれて血だらけとなり、散々な負け方であった。久太郎は之を非常に残念がり、全く自分が柔道を知らなかつた為め敗を取つたのだとて、其日より熊本市の柔道師範星野九門氏の門に入りて、懸命に其道を励んで居たが、沖は其後間もなく退学して仕舞つた。今短艇部はこんな部員を持つて居たから、永く無事である筈がない。其頃日清戦争にて分捕したる大形のボート二艘を、紀念として海軍

省から五高へ下げ渡さるることとなった。後日此等の短艇を大連・旅順と名づけて、永く保管に持て余した、此二艘の舟を引取る為に、龍南会より短艇部員数名を佐世保に派遣して、自ら廻航せしむることとして、久太郎を宰領とした。而して舟は無事に着したが、数日の後久太郎が余を訪れて頗る面目なさそうな様子で、先生に御願があるかと切り出して、こう言った。廻航の任務中、往途は無事であったが、帰路に此紀念船の修繕を加うる為に某所に滞在中、徒然に乗じて一同盛んに飲食をなし、正當の仕払の外に、百円足らず使い込んで仕舞、如何に後

悔するも仕方なし、又弁償の道も立たないから、どうか救つて呉れらるる方法はないかと。余は厳しく其不都合を諭した末、夏目君は昨今赴任した人で、累を同君に及ぼすには忍びないから、余等の仲間では弁償も出来様から、職員中これこれの人々を歴訪して哀願して見るがいいと話して、余はまず三円許彼れに渡した。共後此等部員は、部長には秘して、指示したる職員を歴訪したが、久太郎が平素職員間に人望なかりしたため、皆はね付けて取り合はなかつた。余も亦学校で之等の人々に代つて説いて見たが、なかなか承知しない。然るに夏目君が程なく此事

を漏れ聞きて、直に全額を償い、同時に部長を辞して仕舞った。赴任早々である上に、当時薄給に衣食しながら、寝耳に水の災難を、一言の愚痴も言わず、奇麗にさばいて仕舞った。責任を重んずる点と思いい切りのよい例は、同君として此外にも多々あったが、一寸常人と異って居た。

四

夏目君の五高に就任された時、英語の主任は佐久間信恭君であった。同君は余が英語学校在学中先輩であった

のみならず、其の令弟と同級であり、又同じく幕臣であつたから、余が五高在学中、殊更親しくして居つた。同君は資性極めて正直なる、義侠に富めることは殆ど類を見ない位であつた。所謂好んで身を殺して仁をなすことを任とする様で、余は常に畏敬して居た。然し恰も夏目君の幼時の如く、自から戒むると同時に、他人の非を責むることも激しくて、屢々人と衝突したことがある。夏目君が佐久問君と何事によらず喧嘩でも始めやせぬかと、君が赴任当時より私かに心配して居たが、之は全く杞憂であつた。善く喧嘩をする佐久問君と疍癩の強い夏

目君とは、終始互に相信じ、一度も忌わしき事件は起らなかつた許りでなく、親交を続けて互に賞て居た。要するに二人の心の中に、毫も忌わしき分子が存在して居なかつた証拠である。

夏目君が曾て小説家として他の小説家と共に西園寺さんに招かれたが、之を辞退したことを新聞でみた。当時余は此事について人々が夏目君を様々に批評するのを聞いたが、幼時より同君の性質を善く知れる余には、夫等の判断が皆な当を得ない様に思われた。中には随分聞き苦しいことを言うものもあつた。例えば売名のため、或

は高慢のために、或は招かれた人々が玉石混淆するためであるなど、馬鹿気た評をなすものもあつた。夏目君の頭には文学趣味の外、一物も留めんない。故に眼中首相なく、貴族なく、政党の首領もない。故に西園寺さんに招かれたのは、恰も知らぬ一政治家から招かれたに過ぎないと思つたであらう。されば態々羽織袴などつけて、此種の人の招きに応じて、愉快なことはあるまいと考へて、謝絶したに過ぎまい。果して会合の結果は、實につまらないものであつたらしい。飲食に暫く雑談、終に俳句の寄せ書位で散会したではないか。君が幼時よ

り人に頼つて榮達を求め、或は自己の利益の為に交際するとか、或は心になき世辞を言うとか云うことは、俗に所謂薬にしたくともないと断言することができぬ。故に世の軽佻浮薄の眼より視れば、権式ばる様にも見え、或は無愛想にも思われ、或は高慢とも察せられ、或は無精にも考えらるるに相違ない。唯君の性質として好かぬこと、又は意志に戻ることに就ては、毫も人の誘惑に陥らなかつた。されば君が適意の時は車夫とも会飲したであらう。或は馬丁の招きにも感じたであらう。

又君が博士を辞退したことも、新聞で知った。當時も

亦君を色々に批評するものがあつた。例えば大学在任中冷遇されしために、すねて辞退したのだとか、或は文部省に對して不平を抱て居たためだとか、或は己より学徳低きものが既に多く博士となつて居たためだとか、途方もない判断を下すものも少なくなかつた。若し君が大学教授であつて、或は制度上博士号がなかつたら其任に堪えぬと云う場合であつたら、其職を辞してまでも博士を辞退する程の非常識の人ではないが、当時君の境遇は十分自活の道を得て、氣儘に文学趣味を發揮することが出来たのである。されば博士号を受くるために、文部省な

どに出頭する必要は毫も認めないではないか。殊に君は常々人爵を賤むことを訶々かか口かに漏して居たから、猶更此意志より拒絶したのであろう。或時余は君にこんなことを話した。独逸の或鉱物学者で、今は善く記憶せぬが、某と云うものがあつた。或功績で勲三等に叙せられたが、勲章の中心に紅宝石のあるのを見て、欲気もなく勲章を叩き破りて紅宝石を摘出して実験材料に供したが、其後数年を経て更に功績によりて叙勲せらるる達しに接して、賞勲局に出頭せなければならぬこととなつた。然るに此時は前に受けたる勲章を胸間に掛けて行くのが例で

あるから、はたと行詰って仕舞った。そこで遠近の交友を訪問して、中に一人勲二等章を持って居るものを知つて、此者より勲章を借用して出頭した。素より本人は自分が初めに授かりたるものが、二等であつたか三等であつたか、気に止めなかつたのである。賞勲局では当局の者が彼に二等勲章を授与せんとせしに、彼已に胸間に二等章をぶら下げて出で来たから、当局者は非常に狼狽して、一往台帳を調べて見たが、前に授けたものは確に三等であるから、本人に就て之を問い質してみたるに、前の事実を白状して平然たるものであつた。そこで仕様が

ないから皇帝に其由を奏聞した所、皇帝も彼が学界に忠実なるを嘉し給いて、其罪を咎められず、更に勲一等を授けたと云う話を或る書物で見たが、虚か実か分らぬが、面白い話ではないかと言った。君は曰くほんとに其通りだ、位階や位置や勲爵が其人の鼻にぶらつく様になったら、もう駄目だ。寧ろ書物を焼いて仕舞うに如くはないと熱心に答えたことなど、今に記憶して居る。(二月十九日)

日本文学電子図書館

「漱石全集 月報 昭和3年版
昭和10年版」

著 者：

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館